

昭和の語り部

兵庫県 木下 生一郎

一 危機一髪の恐怖

それは、昭和二十（一九四五）年九月二日の午後七時から始まった。終戦の日まで我が家に御用聞きに来ていた中国人が、いつものように玄関の外から呼び掛けていた。こんな時間になにごとかと訝しく思いながらも、玄関の戸を細めに開けたところ、そこに「さあっ！」と差し込まれたのは、なんと銃剣であった。私は大声を出して家族を呼んだ。

当時、我が家には内地から旅順医学専門学校に入学したが、終戦のため学校が閉鎖され内地に戻れず、さらに寄宿舎も占領されてしまったので、やむなく我が家を頼って寄留している医学生が二人いたが、私の大声を聞きつけて二人が玄関先まで飛んで来た。三人がかりで戸を開けさせまいと、力をふりしぼって抵抗し

たが、銃剣を差し込まれているので、どうしようもなく乱入された。見ると屈強そうなソ連兵で、銃を我々の方に向けて言う言葉は「マダム！ マダム！」だけだった。雰囲気から察するに、目的は当然に女性である。私たちは「ノー、ノー」と答えるが、軍靴のまま部屋に乱入して来た。東の部屋、真ん中の部屋と次々に見て、さらに西側の部屋に向かった。その西側の部屋には、気分が悪く床にしていた母がいた。女性と見ると、年齢に見境もなく襲うという手口のソ連の兵隊なので、私はとっさに後ろから飛びかかり、ソ連兵の首を絞めた。それを見て、医学生の辻際さんが前に飛び出して、ソ連兵の銃をつかんだ。その瞬間に「バーン！」と発砲したが、私たちはひるむことなく格闘をして、ソ連兵を外に追い出した。

ふと我に戻った瞬間、私たちは顔色が変わった。銃口が向けられていた先の天井裏には、姉の信子が隠れて寝起きをしていたのである。弾は天井と屋根を貫通していて、隠れていた姉の横四十七センチメートルの所の布団にも穴が空いていた。まさに危機一髪のところ

であった。

弾が外れたことも幸いであったが、実はその日の二日前までは、東の部屋の床の間に箆筒を置いて、緊急の際にはそこに隠れることに決めていたが、だれ言うことなく「そこはなんとなく危ない」とのことで、天井裏で生活をするようになったのだ。万一、箆筒の裏だったら必ず見付かり、襲われていたであろう。そうなる、またどんな状況が起きていたか分からない。そう思うと身の毛がよだつようだった。

その夜は、男三人は恐怖の絶頂で、考えれば考えるほど悪い方にばかり走っていた。逮捕されて刑務所に送られるか、またはその場で銃殺になるのかのいずれかかと思ひ、死を覚悟したことは言うまでもないことだった。今生の食べ納めとばかりに、焼餃子を有り金をはたいて腹いっぱい食べたが、だれもが朝まで眠れなかった。

夜が明けてから、私は旧旅順警察署に行った。門の外には、丸腰の日本人の警察官が立番をしていたので事情を話すと、警察署の中の右側のカウンターで、通

訳を交えての尋問を受け、終わったら「家で待機せよ」ということになった。

家に帰ってから二時間ぐらい経ったところに、通訳を連れたソ連軍の将校が来て、銃剣で傷ついた玄関の戸や、発砲による天井の弾の跡などを実地検分した。その結果は、「不問にする」と判断され、先の曲がった銃剣付き小銃を持ち帰った。そのとたんに安心したのか、私たちは腰が抜けてその場にへたり込んでしまったことを、今でもはっきり覚えている。

終戦後の旅順市大津町十一番地で起きた出来事であった。

二 私の生い立ち

私は昭和四年七月二十日に旅順市鯖江町四番地で生まれた。父は、私が物心ついたころは旅順の市役所に勤めていた公吏（現在でいえば地方公務員）であった。

今、生存していたら百二十四歳ということになるが、佐賀県の有田工業学校を卒業したというほかは、よく分からない。いつ渡満したのかという正確な時期も分

からないし、どんな理由で旅順に根を下ろしたかも全然知らない。ただ、四歳年上の姉が、長崎県の佐世保で生まれているので、恐らくは昭和になって早々に渡満したものだと思われる。考えられることは、工業学校を出ているので、当時満鉄の区長をしていた自分（父）の兄に呼ばれたのか、または高額の手当がつくという公務員にあこがれたのかは、いまだに我が家の謎になっている。

私の名前も、届け出の前日までは「満州男」^{ますお}だったらしいが、その日にお祝いに見えた父の兄の亀平伯父さんが、今までに三人の男の子供が亡くなっているの^で、名前にこだわり「生きる一郎」と付けるようにとのきつい言い付けで「生一郎」となったと、ことの次第を母から聞いた。父は公務員なのに、なぜか母は美容師で、昔からよく言われる「髪結いの亭主」ということであつた。父の後を追って渡満するまでは、佐世保市の松浦町で妹のスエノと一緒に美容院を自営していた、と伯母から聞いていた。佐世保の店をたたく

まで父の後を追って渡満したことは、昔は亭主の言うことはよほど強かつたものと思われる。

私が数えの四歳になったとき、母は突然に私を連れ、姉の信子を伯母の家に預けて、パーマネットの技術修得とヘヤードレッサーの資格を取るため、半年間の講習に東京に行った。

母と私は、従弟の渡辺鏡次氏の家に寄留した。場所は杉並区であつた。従弟は警視庁の警察官だったが、子供がいないので珍しさも手伝って私をかわいがってくれた。近所に四階建てのビルがあつたが、確か二、三階が歯科医院で、歌にでも出てくるような「美代ちゃん」とエレベーターで終日遊んでいて、怒られた記憶がある。

半年間の講習を終えて旅順市の我が家に戻つた母は、想像を絶する忙しさとなつた。「門前市を為す」の諺どおりで、午前七時から午後七時までフル回転の状況となつた。

パーマを掛けるのにはかなりの時間がかかるので、待合室では半分居眠りしながら待つている人も結構お

られたし、待合室で遊んでいた私は、お客さんに随分かわいがられたものだった。

小学校は、当然のことながら旅順第一尋常高等小学校に入学し、「い組」になった。姉が言っていた話として、一年生の私が「折り紙」とか「遊戯」とかが嫌いで担任の満井先生に逆らうので、よく運動場で一人で遊んでいるのを見掛けたとのことであった。そのことは私も記憶にあるが、折り紙とか遊戯とかは女の子がするものだと言い続けていたらしい。お陰で、今でも折り紙は大変に苦手としている。

私は小学校での六年間を一人の教師に習ったことは偶然といえると思っている。ろ組の連中は、各学年ごとに担当の先生が替わり、結局六人の先生に習ったことになる。私が習ったのは、満井先生と村田先生であったが、両先生は学問もさることながら、小学生の私たちに盛んに社会学を教え、人間形成に努めておられたような気がする。そのことに気が付いたのは、大人になってからのことである。

三 中学生時代

中学校も、当時としては当然のことながら旅順中学校に入学した。旅順中学校は校風も厳しく、プライドも高い学校であった。生徒間の上下関係も厳しかった。入学したころは、第二次世界大戦も始まっており、ハワイ真珠湾の強襲の成功や、シンガポールの陥落などの緒戦における勝利で、旅順でも沸き立っていた。昼は旗行列、夜は提灯行列が行われていたし、一般家庭には砂糖の特別配給があった。

軍による押せ押せムードとは裏腹に、一年生の三学期からは英語の教科が廃止になり、一般社会でも自粛されてきた。同級生の中でも英語の嫌いな者は、小躍りして喜んでいた。なぜか私は、英語廃止を喜ばなかった。英語の担任は大城先生で、旅順中学校の先生の中では珍しい沖縄出身であった。先生は小さな声で、英国の国歌「ゴッドセイブ・ザ・キング」を口ずさんでくれたことがあった。そのことは、今でも脳裡にある。

二年生の一学期になると、旅順市内に造営中の別格官幣大社・関東神宮の松毛虫取りに駆り出される。ど

れほどの成果があつたかは、知る由も無かつた。

四 学徒動員

三年生になると、学徒動員令によつて各クラスはバラバラになつた。ある者は旅順の郊外に設置された対空監視哨へ、またある者は軍需工場へと動員された。

私は別働隊として、大連湾の対岸にある一大工業地帯

カンセイシ

の甘井子に送られた。ここでは、今までに見たことも

聞いたこともない鉄工業の「新和鉄工」へ配置された。

軍需産業の一環ということで、いや応も無く作業に就かされた。私の仕事は、北満方面で行動する軍馬の蹄鉄に嵌め込む、スパイクの製造部門であつた。焼けた金属を、柄の長いペンチでネジを切るためのダイスに挟むのだが、慣れないのでペンチまで挟んでしまうなどミスが続出して、その都度怒られていた。

動員中でも戦況はどんどん悪くなり、それとともに食糧事情も容赦無く悪化していった。飯盒の蓋のお菜

入れには、海雲もすくと沢庵だけという日も多くなつてきた。

どういふ風の吹き回しだかよく分からないが、同県人ということで、事務所に勤務する古賀さんという女性の方が、毎日のように私にお菜を差し入れてくれた。手渡し場所は、正門右側にあつた救護所で、吉田さんという守衛さんが快く引き受けてくれた。今様に言えれば、淡い恋心もあつたやもしれない。古賀さんのご主人は、応召されて戦場にあつた。殺伐とした時代における、少しほのぼのとしたひと駒であつた。その後は、一度もお会いする機会はなかつた。

四年生になると、動員体制も再編成され、今度は同じ甘井子だが、別の会社の満州化学工業株式会社という化学物資の生産工場に配置された。ひと口に化学工業の工場といつても、大連市で使用する都市ガスの大半の量を製造し、海底配管で大連市に圧送しているとのことだつた。また、別の酸素工場では液体酸素を造り、流安工場では硫酸を原料にして肥料を造り、ガスを反応させて硫酸を造るなど、想像を絶する大規模な大工場であつた。私は、石炭を乾留して都市ガスとコークスを造る工場に配置されたが、発生する熱の熱さ

と、石炭から出るガスに日夜悩まされながらも、お国のためという一心で頑張っていた。「嗚呼！ 紅の血は燃ゆる」という学徒動員の歌に背を押されていた。

五 終戦を迎える

昭和二十年八月十五日の正午に、重大放送があるの
で本社ビル前に集合との通達があった。作業服のまま
で集合、やがて朝礼台の上に置かれたラジオから、天
皇陛下のお言葉が伝わったが、実際には「ザアザア！」
という雑音で、ほとんど聞きとれなかった。放送が終
わってから、先生たちから敗戦の事実を知らされた。

工場を出て市内を通ると、中国人は既に日本の敗戦を
知っているようであった。寮に戻ると、学生は自宅に
帰る準備をせよとの指示があつて、急いで荷物をまと
める。その際、学校での軍事教練に使用した小隊長用、
中隊長用の指揮刀が二本残っていた。仲間は、裏庭に
埋めようか、それとも海に捨てに行こうかと額を寄せ
合つて話し合っていたが、それを聞いて私はとっさに
「一本はおれがもらおう！」と言つて、布団袋の中に隠
した。それが後日非常に役立つとは、そのときはだれ

も思わなかつたであろう。

仲間たちは、それぞれに苦勞をしながら各人の家に
戻つたが、旅順に戻ると市内は進駐して来たソ連兵に
よつて荒らされ放題になつていて、その有様は筆舌に
尽くし難いもので、乱暴狼藉の限りであつた。その最
たることが、最初に書いた「危機一髪の恐怖」である。

我が家はなんとか大きな難は免れたが、本当に悲惨
だつたのは衛戍病院であつた。入院患者でも、歩ける
人は急いで病院から出て行つたが、重症患者をどうす
るかという最中に、数十人残つていた従軍看護婦に目
を付けたソ連兵が、夜な夜な病院を襲つては銃で脅し
て裏山に連れ込んで乱暴狼藉を働いた。「お助け下さ
い！」とか「手を放して下さい！」という哀願の言葉
と共に悲鳴が聞こえてくるが、我々の力では何ともで
きず、戦に敗れた情けなさど悔しさをかみしめるだけ
だつた。後日になつて聞いたところでは、連れ出され
るときに、手榴弾で自決された方も数人おられたとの
ことだつた。戦陣の教えを忠実に守つた大和撫子であ
つたことを痛感した。

六 強制退去とその惨状

他人ごとのように思っていたのに、遂に我が家にもソ連兵がやって来た。通訳の話によると、「一時間以内にこの家から出るように」とのことだ。家の外には、武装兵が三人ほど立っていた。母の指示で家中の防空カーテンを全部外して、それに貴重品とか食糧品などを包めるだけ包んだ。私は、急いで常盤町の辺りまで走って大車（二頭立ての馬車）を雇って来た。せき立てられるようにして、今日まで数々の思い出のある住みなれた家を後にした。昼前に家を出たが、白銀山トンネルを越えるころには午後一時ごろになっていた。トンネルを出て数分後に、ばらばらと駆け寄ってくる中国人がいた。どうやら、我々の荷物を狙っているようだった。母と姉を荷物の中央に移させて、我々三人の男が対応することになった。こんなこともあろうと、木銃の先に学徒動員の際に持ち帰っていた指揮刀を取り付けたのを振り回して、相手を逆に脅した。まさか、男が三人も乗っているとは思わなかったらしい。しかし、女性や老人ばかりの車が通ったときには、相

当にあくどく追い剥ぎをしたことであろうと思いが胸が痛んだが、これもまた敗けた国民の悲哀であった。

夕暮れになって、やっと大連に着いた。西広場と思われる場所に日本人居留民団の事務所があり、そこで我々は日の出町の収容施設に割り当てられた。日の出町の満鉄官舎地区にも自警団のような組織ができていて、その組織から「吉田さん」の家を指定された。吉田さん宅は応召家族で、奥さんと十二歳を頭に三人の女の子供さんが住んでいた。場所は、大連実業学校のすぐ下であった。

それからの毎日は、何をするともなく外ばかり眺めて過ごしていた。しかし、そこで見ていたことは、まさに地獄絵図そのものであった。毎日十人ぐらいの集団が、多いときには十四、五人ぐらいのグループが歩いてやって来る。それは北の方から下って来る避難民で、言葉を発する元気もなく、身に付けている衣服はぼろぼろで、しかも餓死寸前の状態だった。たまりかねて聞くと、日本の東北方面から北満に入植した開拓団の人たちで、その中の比較的若い集団は、満蒙

開拓義勇軍の人たちの集団であった。逃避行を続けて、ここまで落ちのびて来たが、だれもが道中における真実を語ろうとはしなかった。幼い子供を中国人に預けた人、飢えに逆らえずに泣く泣く子供と食べ物とを交換した人、さらには、泣き声を立てて集団に迷惑が掛かると置き去りにしてきた人など、全員がまさに生き地獄を体験してきた人の行列であった。大連にたどり着いても、安心したため最後の力を出し切ってここまで来たのか、いろいろと原因はあろうが、毎日のごとくに亡くなる人がでた。

町内では、体力のある者が埋葬に狩り出されたが、十月の末ごろまでは何とか穴も掘れたが、十一月の半ばになると地面が凍ってしまい、ほとんど穴が掘れなくなつて実にすさまじい光景となり、筆舌に尽くし難かった。

七 暴動に紛れての略奪

食べ物もお金も無くなり、ほとんどの日本人は売りを始めていた。旧浪速町の辺りでは、品物を腕に掛けたり地面に広げたりして、買手の中国人やソ連人

と片言交じりの言葉や身振り手振りで交渉をしていた。交渉成立しても、お金を間違ひなく受け取る人はまだましであった。女性が一人で立ち売りしていると、集団の中国人たちが寄つて来て品物を見るふりをして「あつ！」と言う間に品物ごと消費していなくなり、泣く泣く帰つて行く人を何人も見掛けることがあつた。それを見て、我々若者が数人で組んで、日本人の家から貴重品や着物などを預かつて立ち売りをして、手数料をもらったこともあつた。

そんなある日、私にちよつとした情報が入つた。「今夜、日本の税関倉庫で暴動が起きる」ということだつた。私はG君と共に町田さんからリヤカーを借りて、大連埠頭に近い税関倉庫に引いて行き、五十メートルほど手前の所にリヤカーを隠して倉庫に向かつた。既に、暴徒は倉庫の扉を壊し始めていた。私も薄暗い倉庫の中に見付からないようにして飛び込み、手当たり次第に持ち出し、リヤカーを隠した場所に運んだ。G君に見張りを頼んで再び倉庫に戻つた。一番近くにあつた硬い紙箱を持ち出すときに近くで銃声が聞こえ、

暴徒二、三人がうづくまつていた。私はそれを見て三度目の突入は断念した。運んだのは、木箱二個とやや小さなダンボール箱が一個だった。夜明けと共に、近くの大連女子商業学校の裏門階段下に運び開いた。期待していた食べ物は無く、競馬印のポマードとチック、二つ目の木箱には軍手、片隅に女性の使うヘアーストットの束が十束ぐらいあった。今でも理解に苦しむ内容物である。驚いたのは最後に持ち出した段ボール箱で、開けてみると立派な包装の紙箱で、中には注射用のアンブルが入っていた。アンブルは家に隠し、それ以外の品物は早速に大連三越の裏で立ち売りをした。近くでは、旅中の数学担任の佐藤先生が味噌の立ち売りをしておられた。みんな生きるために、恥も外聞も捨てた姿であった。

段ボール箱のアンブルを、我が家に寄留していた医学生に見てもらったら「サルバルサン」という性病薬だったが、既に使用期限が過ぎていると言われた。私も捕まるのが怖くなって、三越裏では売らずに、離れた西崗子の闇市で中国人の買手に全数売って、逃げ

るようにして戻った。四百円ほどが手に入り、大連駅前の連鎖街で久しぶりに豚丼を食べて、一週間分の栄養補給ができた。

八 十六歳で班長に

売る物も無くなり、仕事を探していた。知り合いになった家の前の永井さんが、「私の働いている網会社で人の募集をしている」と言ってくれたので、早速面接に行った。場所は旧弥生高等女学校で、漁網の糸を作る中国系の会社であった。すぐに採用になり、初歩的な糸繰り、合糸の訓練をそれぞれ二日間ずつ習って、本番の捻糸工場に配置された。組編成は有無を言わず男性二人女性三人の混成班で、そのうえに力仕事だった。約一時間の打合せをしていよいよ実務に就いたが、話の成り行きからいつの間にか私がリーダーになった。私は仕事にかかる前に、次のことで話し合いをした。過去のことは忘れて私に任せてほしいことと、これからは本名で呼ばずにニックネームでお互いに呼び合いたいと発言し、四人の同意を得た。一番大柄で体格の良い女性には、「男女の川(当時の大相撲の横綱

の四股名)、二番目に小柄で元気の良さそうな女性には「タンクタン九郎」をもじつて「タン九郎」、箸より重たい物は持ったことがなさそうな、上下をお召しの生地で作ったモンペ姿の女性は「小笠原流」と、そして男性の渋谷君には「はりきりボーイ」と名付けて団結を誓い合った。

勤務は昼勤と夜勤とに分かれたが、我が班は毎日の成績は常に一位となり、他の班は不思議がるだけで、これといった工夫はしなかった。スピンドル以外はずべて木製の機械で、その上に手回しであったので、弱い女性に右回し百四十回、左回し六十回はとてもつらい仕事だった。それに全員が満足に食べ物を摂っていない。そこで、私は「はりきりボーイ」の渋谷君と話し合つて、女性がバテ気味となつたら数にこだわらずに我々男がすかさず交代する、と申し合わせた。またベルトは細いロープなので、ひと晩に一度はロープが切れる。ロープが切れると、八木工場長が山本技師に連絡することになっていた。あちこちの機械が故障するので、なかなか来てもらえず、ひと晩で四十分ほ

どのロスを生じて能率が上がらない。そこで、私は修理技術を習得した。渋谷君を助手にして、我が班の故障によるロスを約十五分で解消し、ますます成果を挙げた。そのうちに、みんなは私のことを「班長さん」と呼ぶようになった。そのときの私の年齢は十六歳で、中学校四年生の年である。会社の名称は「東裕魚網工廠」であった。そして成績の悪い班は毎月解雇され、寒い冬の最中に何人かが路頭に迷つていた。

製網工廠で夜勤明けのある日、間借りしていた竹本岩太郎氏の所に、中国人の通訳を連れたソ連軍の高級将校が尋ねて来た。扉の無い応接室での会話のやりとりは、全部聞こえていた。話は「終戦まで旅順港でとつていた鰻を取ってもらいたい」という話で、そのために旅順から尋ねて来たのだという。竹本さんは話を聞いてやや間を置いて、「道具のすべてと人間が揃えば、鰻漁を再開しても良い」と答えていた。相手の高級将校も喜んで、その場で交渉成立の祝宴が開かれた。ウオッカとチーズとソーセイジだけが、私も入れてもらった。ロシア産の高級なチーズは、まるで石鹸のよう

な味だった。

翌日から、竹本さんの長男の健一さんが以前の従業員探しが始まった。鯨網漁には十七人の漁師が必要とのことだが、五日で探し出した漁師は十二人で、不足は素人でも致し方ないとして私にも声がかかり、鯨が食べられることを期待して応じることにした。

昨日まで働いていた漁網工廠に事情を話して休暇願いを出しに行ったが、工廠では復職の保証の無いことを告げられた。寝食を共にした班員には、私の持っていたアイデアをすべて伝授し、涙の別れをした。その後その人たちは、満州でも日本に帰ってからも会うことは無かった。

九 鯨網漁に加わり、危険と遭遇

我々五人の素人を含め総勢十七人、それに親方を加えた十八人は、ソ連軍のトラックに乗せられて旅順に向かった。映画館裏の倉庫に接収されたままの状態、網はあった。一方、港に船を見に行った者の話では、

櫓が二本不足している以外には使い物になるとのこと、櫓二本不足を申し出て、OKをとった。四日目の

午前中、鯨の群れ発見の報せが届いた。ただちに出漁した。合図船を中心にして漕ぎ出すが、「ぼうっ」としている我々素人はどなられた。船を漕ぐのに邪魔になつたらしい。やがて殺気立つてきた。網を入れ半々に分かれて網を引く。その日の鯨の水揚げは約十一屯だったが、手足はちぎれそうな冷たさだった。網を揚げ終わつたのは午後五時ごろで、震える我々が宿舎に帰つたところを見計らつて宿舎に届けられたのは、米とみそ、それに白酒（中国の酒）であつた。半年ぶりの米のご飯に酒も加わり、その夜は酔いつぶれてしまった。一番網は成功したものの、二番網は全く見当もつかなかつた。港に見張りに行つていた者からの報告では、漁をする東港に大型の砕氷船が修理のために入港したとのことで、当然大型の船ならば港の中で方向転換するのに、何度も前進、後進を繰り返すので、鯨の群れは蹴散らされてしまったと思われた。

一週間が過ぎ十日も過ぎるころになると、漁に出ない我々に対してだんだんと冷たくなり、食べ物もどんどん乏しくなつた。

ある夜、竹本親方が全員を集めて「しばらくは鯯が群がる気配がないので、一応全員帰宅せよ！」と言われた。みんなと話し合いをして家に帰ることにしたが、正式に帰宅を許可されたわけではないので、ソ連軍には送ってもらえない。私は、元警察官で柔道五段の猛者である門脇倫さんと組み、暗くなるのを待つて旅順駅に向かった。蒸気を出している機関車に連結されていた貨物列車の無蓋車に、隠れて飛び乗った。腹をすかしている母と姉のために、リュックサックに鯯を七匹入れて背負っていた。

深夜になって貨物列車は動き出した。途中で一度だけ停車したが、無事に大連に着き、幸いなことに駅の手前一キロメートルほどだったので飛び降り、柵を乗り越え聖徳街と思う方向に歩き、門脇さんの家に着いたのが朝の五時ごろだった。怪しまれるので、夕方まで門脇さんの家で仮眠して帰宅した。

すぐに鯯を煮たり焼いたりした。焼いたのは天日で干し上げた。栄養失調の我が家も生き返ったようだった。その夜、家主の永井さんの娘さんが亡くなった。

六歳だった。

十 引揚げの決心と集結場での商売

飢えと寒さとの闘いの中で旅順から大連へ強制移住させられて、早くも一年半が過ぎていた。ふと気が付くと、祖国への引揚げはとうに開始されていて、播磨町には日本人家族は四、五軒しかなく、日本人に会う機会が減っていた。そのころの我が家は、日本に帰ってもものすごいインフレで餓死者が多く出ているという話で、日本に帰ることはあまり考えていなかった。角の家に越して来た市政府役人の王鴻英さんという中国人が、偶然にも父に世話になった人で母とも面識があり、何かと我が家の面倒を見てくれた。当然なことに食料品も差し入れてくれたので、それに甘えていた。

ある日、母がぼつりと「やはり死ぬのは、日本で死にたい」と言った。それを聞いた私は驚き、すぐに日本人居留民団事務所に行き、引揚げを申し出た。事務所の話では、「一般人は最初の一団から百団までの編成はもう終わった」ということだった。その後で「強制的に残された人たちがいる。人数がまとまれば

第百一団の編成があるかもしれない」とのことだった。藁にもすがる気持ちで手続きをした。

それから約二カ月後に、百一団が編成されることを知った。しかし引揚船が来るのは未定とのことで、母には「間もなく引揚船は来るらしい」とだけ告げた。あまりにも弱った母をこれ以上落胆させて、死なれては困ると思ったからである。やがて、百一団の前期の引揚船の入港は二月末ということが、民団の扉に張り出された。昭和二十二年一月末のことであった。

引揚げの時期までの生活は、引揚船が入港する集結所で物売りをするにしていた。主に食べ物を買ったが、だれ言うことなく「引揚者に対する検査は厳しい」というわさが広まった。お金は大人一人に日本円で千円、貴金属は絶対に駄目ということだった。怪しいとみられたら、女性でも全裸にさせられるとの風評を聞いた引揚者は、みんなこぞって持っている物を放棄する考えだった。そんな雰囲気の中で、姉と私は食べ物を中心に立ち売りしたので、隠して持っていたお金を全部はたいて買ってくれたので、良い意味では嬉し

くもあり、その反面気の毒でもあり、悲喜こもごもであった。

次々と引揚者を見送り、遂に我が家にも集結命令がきた。場所は確か旧日本橋小学校の校庭であったと思う。注意事項は、大人一人に所持金は千円まで、貴金属石類は一切持ち出し禁止、少しでも怪しいと思われたら全裸にして検査、グループ内で一人でも違反者が出たら、そのグループは今回の引揚げから除外などという、きついお達しであった。そしてグループから一人ずつ監視役が選ばれ、私もその一員となった。監視役とは何をするのかと思っていたら、既に大連埠頭の岸壁に運ばれた引揚者の荷物の番とのことで、一応作業の詰所に入るがとても寒くて、だれ言うとはなく「焚火をしよう」という話になり、その辺りにある燃える物を片っ端から燃やして暖を採った。夜十時近くになり、岸壁で見張りに立っていた人が「来たぞ！」と叫んだ。「すわー」と言って岸壁に行くと、中国人らしい者が漕ぐ舟に、手鉤のような棒を持ったソ連人二人が、我々引揚者の荷物を盗みに来た。丸腰のこちら

は防ぎようがなかったが、だれかが焚き火を投げつけようと言いついたので、大きな焚火をどんと投げつけて撃退した。布団袋のような物が二個、海に落ちたが、どうしようもなかった。

十一 いよいよ引揚げ

引揚船が着岸した。船名は「第一大海丸」で屯数は不明だったが、戦時中に活躍したであろう貨物船を改造した船だった。改造と言っても、貨物室を木製の柵で三段に仕切っただけだった。グループ長が場所を割り当てた。我が家族は最下段の海側で、油の臭いと澱んだ溝川の臭いが混じったような悪臭が漂っていて、気分が悪くなった。

どこが目立っていたのか分からないが、船でも炊事班にかり出された。二泊三日の航海であったが、油と溝川の臭いよりは、甲板上での仕事だったのが良かった。あるとき、乗務員の人と船の一番先にある倉庫に食料品を取りに行ったが、そこで見たのは無造作に置いてあるお棺であった。聞くと、引揚げの途中で二泊三日で最低五人は亡くなる人がいるので、そのために

用意されているとのことだった。ほとんど栄養失調による衰弱死か、日本に帰れるということで緊張の糸が切れての死だそう。いずれにしても、敗戦による悲哀である。

大連を出港して三日後の夕刻に、船は湾に入った。今考えると、長崎県大村湾の針尾港である。甲板は鈴なりの人、人。大人は日本の山を見て、あれは大きな竹藪だと言っていたが、旅順生まれで旅順育ちには竹藪と言われても全然分からずに、ただぼんやりとこれが日本本土かと思っていた。入港したのに上陸させてもらえずに、いらいらしていた。検疫中とのことで、二日目の昼ごろにやっと上陸が許可された。

十二 日本上陸

上陸棧橋で待っていたのは、消毒薬DDTの嵐であった。それも驚くなかれ、アメリカ兵なのに黒人。私は、幼いときからアメリカ人は色が白く鼻が高く目は青いとばかり思っていたが、いきなり黒人のアメリカ兵に出会ったことは、日本上陸最初のカルチャーショックだった。その黒人兵に頭から足の先までDDTを

かけられて、以前の海軍の兵舎に収容された。無事に日本に帰れた喜びもつかの間、食事は何とご飯にもお汁も小石混じりで、お汁で洗うようにして食べた。

二晩兵舎に泊まり、それぞれの帰郷先に帰れることになったが、目の不自由な母を連れて、行ったことのない父の故郷に行くすべが分からなかった。有田・武雄方面に行くトラックがあるという情報を得た。母に聞くと、人と荷物を運んでくれるならそれが一番の早道、と言われたので申し込んだ。料金は、一世帯千円であったが、引揚げの際持ち帰ったお金は家族で三千元、その三分の一が故郷に帰るために消えてしまった。国道沿いにある家はすぐに分かり、降ろしてもらって家族三人玄関の前に立った。そこには父の姉夫婦が住んでいたが、母があいさつと日本に帰って来たことを述べた。しかし、そこでもんでもないことが起きた。伯母であるヨシノ婆さんが、父を知らないと言い出した。母は昭和八年に伺ったことや、佐世保在住の従兄の名前などを挙げて説明したがとぼけていて、私たちはその家の玄関で立ちすくんでしまった。すぐにほか

に行くあてもないので、二、三日置いて欲しいと頼み、収容所でもらった缶詰やなけなしのお金を包んで渡したら、たちまち態度が変わり、父の名も思い出したのことだった。

その夜、ヨシノ婆さんたちとゆっくり話し合ったところ、天津から引き揚げて来た従兄の一夫さん一家が約一カ月、奉天から引き揚げたややはり従兄常次一家が約十日滞在して、かなり迷惑をかけて出て行ったように、二度と引揚者は家に入れないと夫婦で決め込んでいたところに私たちが転がり込んだということで、玄関払いの理由が分かった。

引揚援護局で紹介された農家への手伝い、あるいは炭鉱での仕事のいずれも断った私と姉だったが、早く働かないと明日からの食べるものにも困るようになった。

母の意見で、母の甥が佐世保で働いていることを知り、連絡をとって佐世保で働くことに決めた。

十三 転職！ 漁船に乗る

佐世保で就職はしたものの、給料が安くて満足な生

活はできなかつた。日給月給で二千五百円だつた。生活に余裕のある人は映画の話に花を咲かせていたが、四十円もする映画は一度も見なかつた。

そのころ、大連で知り合つていた長井君が熊本の新線学校を卒業して山口に帰る途中に立ち寄つてくれて、旧交を温めた。長井君は私の生活を知り、船乗りの話をした。私は、母の止めるのも聞かずに有り金四百円を握つて夜行列車に飛び乗り、下関に向かつた。面接の結果は、漁師の経験が無いのでどうしてもということなら炊事係ならば乗船させると言われ、決心して採用された。

船は七十五屯の木造船。漁種は以西底引き漁で、漁場は東シナ海及び黄海という船だつた。出漁して二時間もすると船酔いになり、嘔吐の連続。そして胃液を吐き出した。しかし、どんなに気分が悪くても三度の食事は作らねばならず、自分は喉が通らないが食事を作る苦しさは、言葉では言い表せない。ちよつとでも横になると、棒ブラシで殴られる。話には聞いていたが、世間で言う「刑務所に入ろうか、手繰船に乗ろう

か」というその手繰船である。船内はいつも殺気立っている。うっかりしていると、ワイヤーロープに巻き込まれるか、漁網と二緒に海に引きずり込まれるか、いずれにしても死と隣り合せていて、板子一枚下は地獄である。

二隻の船で交互に網を入れ、二十四時間操業。ちよつと暇があると思うと、魚を冷やすための氷の移動や魚を詰めるトロ箱作り、その合間に食事作り。人間の苦痛もいろいろだが、私の経験では空腹に耐えることもつらいが、睡眠不足はさらにつらいことであつた。死も怖くなるが、佐世保で暮らし赤貧を考え菌を食ひしばつて耐えた。目の不自由な母のために、六畳一間でもよいから家を建て、便所に行くにも粗相しないように、そしてびくびくした生活をさせないためにという強い気持ちがあつたればこそと、今振り返つて思っている。仕事は死ぬほどにつらかつたが、しかしそれなりの報酬があつた。

最初にもらつた給料は九千円。それに、素人なりによく頑張つたと、岡山船長が褒美として千円を下さつ

た。千円札のないころの一万円は一束で、現在の価値で換算すると約二百万円ぐらいの感覚であった。一カ月前まで働いたときの四倍の給料、その上に食事はただ。船が入港すると下関までお金を受け取りに来た姉は、胴巻きの中に札束を入れ、夜行列車で佐世保に持ち帰った。操業中の自由時間に作った小さな干し鰯も紙袋にいっぱいあって、家の近所に配って感謝されたということだった。

三カ月後、機関員の一人が辞めて行った。岡山船長から将来についての質問があり、私は勉強をして船長になりたいと思っているが、炊事係は嫌だということ話を話した。そして、とりあえず機関員になった。漁船の船員は金使いが荒く、給料袋をわしづかみにして遊廓に直行し、三、四日過ごす。命懸けの仕事だから、致し方の無いことだろう。

私は、大きな夢があったので、ほとんど上陸せずに船番をした。それに人の船番も買って出たり手紙の代筆をしたりで、小遣いには不自由しなかった。

夢のような四年が過ぎ、いつものように下関までお

金を受け取りに来た姉から、来月、我が家の新築完成を聞かされた。土地は地主さんから借り、六畳と三畳の家ということ、私は思わず「ばんざい！」と叫んだ。聞けば、私が稼いだお金で爪に火をともしような生活をしていた結果、十七万五千円を払ったとのことだった。一応の夢の叶った嬉しい年末となった。

建った場所は佐世保市藤原町で、左側の崖の上には牛買稻荷神社があった。

十四 戦後の悲惨な姿

国鉄下関駅の西、約百メートルの所に線路下のガードがある。昭和二十二ごろは食糧難の時代で、食べることに必死であった。一般の主婦でも食べ盛りの子供を抱えて大変な辛酸をなめていて、日暮れどきには多くの女性が屯していた。目の前に停泊している漁船の船員たちが目的だった。話がまとまると三々五々と消えて行くが、世間で言う「あぶれ」の人たちは、漁船まで押しかけて来た。目的は食べ物で、船に残っている食糧と引き換えに春をひさぐ姿も目撃された。当時の流行歌「星の流れに」の姿そのものだった。飽食

の現在では、想像もつかない光景であった。

十五 母に命を助けられる

昭和二十六年の九月に入港して私を待っていたのは、姉ではなく一通の電報だった。「母危篤、すぐ帰れ」とあった。なんでこの時期にと思った。私が乗っていた「以西底引網漁」は、十月から翌年の三月までの半年間で約一年分を稼ぐ最漁期であった。

しかし、一人しかない母親のこと、一応、一航海だけの休暇をとって夜行列車に乗り佐世保に帰った。

母は、既に宮田病院という精神科の病院に入院していた。病名は今で言う「ノイローゼ」で、当然私のこととは分ならず、口走る言葉は「船が沈む」の一点張りだった。その日から私は母にはりついて看病をした。治療は脳への電気ショック、それが良かったのか徐々に回復した。

私が母にはりついて五日目の朝、病院の待合室で新聞を見て、「日本漁船が中共軍の軍艦に拿捕され、二隻共青島に連行され死傷者も多数」という記事が目に入った。船名を見ると、私が乗っていた「静波丸」とあ

った。私はショックで、しばらく言葉も出なかった。そして、これは母が助けてくれたのだと痛感した。

母の症状が治まったので、残りの給料をもらいに下関の会社に行き、そこで拿捕されたときの惨状を聞いた。私をかわいがってくれた岡山船長は機銃掃射で即死、山本さんも片腕が吹き飛ぶ重傷、二人が即死、三人が重傷のまま連行され、青島の刑務所に入れられたとのこと。容疑は、スパイ行為と密漁とのことであった。

後日の情報では、三年後に無事に帰って来たのは二十五人中の九人であった。ここでも敗戦国の悲哀を味わいながらも、私の運の強さと母の庇護に助けられたことだった。

十六 陸上への転職

乗っていた漁船の拿捕がきっかけで怖くなり、漁船員を諦めた。職を求めて職業安定所に行ったが、当時は朝鮮動乱の真っ只中で駐留米軍が日本人を雇っていたので、すぐに面接があった。日系二世の准尉の質問は厳しく、満州生まれで終戦後二年間も満州にいたの

で、共産思想に洗脳されているのではないかとの質問に、私は即座に「幼いころより軍国主義で育ち、今でも考えは変わらない」ときつぱりと答えた。採用にはなったが、職種はK・P（キッチンポリスネル）で、私はアメリカでは調理場でもガードマンを雇うのかと早合点した。出勤して分かったが、K・Pとは皿洗いのことであつた。少々がっかりしたが、我慢して働いた。私は自分の性格から人にへつらうことが嫌いなので、アメリカ兵から嫌われて残飯桶とその周りの清掃で、調理場に入ることも許されなかつた。

差別と屈辱の日々を過ごしていたある日のこと、小型飛行機から降りた将官によって、予告無しに衛生検査が行われた。検査の重点目標は残飯桶の周辺。私は特別な考えはなかつたが、あてがわれた仕事であつたので、自分が納得するまでピカピカに掃除をしていたが、検査の後一時間ほどして将官が来て、私の職場が最優秀と告げた。それまでは調理場にも入れてくれなかつたのに、ダイニングルームの真ん中に座らせられて、将官の命令で二階級特進した。見習いコックを飛

び越して、正式のコックとなつた。人間どこの国でも、あてがわれたことを真剣に行えば、必ず道が開けることを実感した。

十七 好事魔多し

順風満帆の日々を送り、年が経つた。結婚、そして長女の誕生、喜んだのも束の間、職場でめまいがしたので帰途に病院へ行つた。体温三十九度三分、レントゲン撮影の結果は肺結核。空洞もできていて、強制入院となり、佐世保の市立北病院隔離病棟に入った。診察の結果、全治四年半と宣言され、目の前が真っ暗になつた。しかし、これも人生の試練、神から与えられた休みと自分に言い聞かせた。

その後幸いに退院できたが、良い職は無く、建設業の従業員とか石材業の社員とか自動車販売業の社員などを経て、四十八歳にして自営業を営むチャンスに恵まれた。事業の内容は「金属エンジンアリング」で、お客さんのニーズに応じて設計・開発・試作をして買上げてもらうという資金効率の悪い事業で、幾度か資金面での壁にぶつかったが、ぶつかるたびに戦中・戦

後の苦しかったことを思い出して、歯を食いしばって事に当たり解決してきた。ある意味では、戦中・戦後というのは人生の試練を与えられたものと痛感する。

いつときは、なんでこのような時期に生まれてきたのかと出生を恨み、飢餓のときにはこの世には神も仏もないのかとも思ったことだった。しかし、今日の豊かな生活や多くの家族に囲まれての幸せを、毎日感謝するものである。今日の平和は、国のために殉じた人々の犠牲の上に成り立つものであり、平和を軽く感じてはならないことを、子々孫々に至るまで伝える責任が、我々の年代にはあるものと感ずるや切である。